

日本生態学会釧路大会「公開シンポジウム－要望書のききめ」に参加して
－学問の中立性、官公庁の中立性への疑問－

ば ば しげ ゆき
馬 場 繁 幸

(2004.11.22 受理)

はじめに

平成16年8月25日から平成16年8月29日までの5日間、釧路市観光国際交流センターを主会場にして、第51回日本生態学会が開催された。生まれ故郷の北海道での学会開催であったこと、僭越ながら私がアフターケア委員長をしている日本生態学会の「西表島浦内地区におけるリゾート施設建設の中断と環境影響評価の実施を求める要望書」を含めて「細見谷溪畔林（西中国山地国定公園）を縦貫する大規模林道事業の中止および同溪畔林の保全措置を求める要望書」、「上関原子力発電所に係る環境影響評価についての要望書」の3つの要望書に関する「公開シンポジウム－要望書のききめ－」での発表も引き受けたので、数年ぶりで北海道を訪れることにした。

日本生態学会には久しく出席していなかったので、多くの人たちと話をした。それらの会話の中で「科学者」とか「研究者」と言われる人種は、世の中の動きから取り残され、過去の遺物にしがみつき「未だ研究という錦の御旗を振り続けている」のではないのだろうかと思いはじめ、この拙文を書いてみることにした。

この拙文を読んで憤慨する科学者・研究者がたくさんおられるかもしれない。しかし、憤慨してくれるだけ気概のある科学者・研究者がいるのであれば、日本の科学者・研究者もまだまだ捨てたものではない。

自分の馬鹿さ加減

西表島は、昭和42年（1967年）に記載されたイリオモテヤマネコが生息する島である。このイリオモテヤマネコの推定個体数は100頭（1994年）とされ、まさに絶滅危惧種である¹⁾。この島は面積的には沖縄県で二番目の面積（284km²）で、人口は約2,000人である。しかし、年間入域観光客は36万人以上で²⁾、その多くは空港のある隣の石

垣島（人口約45,000人、面積229km²）からの1日1,000人を越える日帰り観光客である。

私は1978年に琉球大学農学部に赴任してから、多いときは年に15回以上も西表島に通い、累計ではそれが300回以上にも達する。島の住民の多くとは顔見知りで、島の様子も分かっていたつもりである。また、天然記念物で絶滅危惧種のイリオモテヤマネコ、カンムリワシ、セマルハコガメなどが棲息する島であることから「大型リゾートホテルの建設」を沖縄県も環境省も許すことはない」とたかをくくっていた自分の馬鹿さ加減には、我ながら呆れてしまった。

赤子の手をひねるような容易さ

平成14年の秋に西表島の民宿に泊まっていたら、民間企業が申請していた西表島月が浜リゾートホテル開発を沖縄県が許可したとのニュース（平成14年10月23日）があった（図-1）。

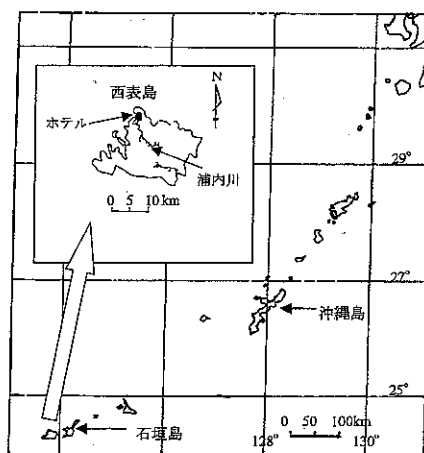


図-1 西表島とホテルの位置

ホテルは西表島の浦内川河口のトゥドゥマリ浜（通称月が浜）に面している

建設企業と行政サイドがホテル建設に関する説明会は開催したが、この手の説明会は「住民の同意を得たという既成事実（アリバイ）作りのための会」になりかねない。世の中の事情に疎い、否、心の優しい住民は「事情が分からないと反対のし

ようがない」との理由で説明会に出席していた。

私の研究室の学生が実験用の試料収集に西表島に行った機会に、説明会に参加し「住民が反対したらホテル建設を中止することもあるのですか」と質問したが、その答えは「建設中止はありえません」であった。このことから明らかなように「住民の意見を聞くための説明会」ではなくて「建設を強行するためのアリバイ工作の説明会」であった。行政サイドもそれに積極的に荷担したのであるから、その責任は重い。事前に情報が提供されず、しかも人の良い地域住民に対して、行政サイドと建設企業が「説明会を開催し住民の意見を聴取した」との既成事実作りを画策したのであれば、その結果はまさに「赤子の手をひねるようなもの」である。

日本生態学会の要望

私は農学部の新入生に「島嶼生物学」を講義している。その講義は「南西諸島のような亜熱帯気候下で地理的な隔離機構が働いている島々では、生物は島ごとに適応・種分化して、種数は多いが、種ごとの個体数は少ない」という内容である。そしてその結論は「南西諸島は、種の適応や種分化に関する研究にとって恵まれた地理的条件下にあるが、島嶼の生態系は適切に管理しなければ、環境の変化によって壊れやすく、しかも個々の種は個体数が少ないので絶滅する危険性が高い」ということにしている。

日本魚類学会に所属し、ホテルが建設された浦内川河口など西表島で魚類の生態を長年にわたって調査されている鈴木寿之氏によると「浦内川には熱帯・亜熱帯でこれまで調査された河川の中では最大、すなわち360種類以上の魚類が棲息し、14種以上の絶滅危惧種、10種以上の未記載種がいる」とされる。沖縄県の開発条例では20haを越える開発では環境影響評価を実施しなければいけないが、ホテル建設企業が最初に開発を申請したのが約1.4haである。したがって、法的には環境影響評価を実施する必要はない。

しかしながら上記の魚類に関する事実や西表島には国の特別天然記念物で絶滅危惧種のイリオモテヤマネコ、キンバト、カンムリワシにはじまり6種類もの天然記念物が棲息することを考慮すると、「ホテルの建設を一時中断して、環境影響評

価を実施すべき」との日本生態学会の要望書は間違ったものではない。日本生態学会はホテルの建設に反対しているのではなくて、環境影響評価の実施、すなわちホテルが自然環境と2000人の住民生活並びにその伝統文化に与える影響の評価を実施して欲しいと要望しているのである。

同様な要望は日本魚類学会が「ユニマツ不動産による西表リゾート開発の中断と環境影響評価の実施を求める要望書」、沖縄生物学会が「西表島浦内地区におけるリゾート施設建設見直しに関する要望書」、日本ベントス学会が「西表島浦内地区のトゥドゥマリ浜（通称月が浜）におけるリゾート施設営業の見直しと環境影響評価の実施を求める要望書」、世界自然保護基金（WWF）ジャパンが「トゥドゥマリ浜（西表島浦内川河口右岸）におけるリゾート開発の問題点について」として建設企業並びに関係機関に提出している。また、そればかりではなくて、全国から多くの人が声を挙げ（第一次原告291名、第二次原告123名）、ホテル建設差し止め訴訟が行われている。

猫に魚の番の開発審査会

「あなた方がホテル建設に反対する理由」はよく理解できる。ホテル建設の企業が提出した「西表島の開発申請に対して、書類の不備がなければ、許可する」のが行政の業務であり、沖縄の自然を守るためには「あなた方の行動が必要だ」などと言って、行政サイドが責任を回避していることに及んでは開いた口が塞がらない。

その一例が、沖縄県開発審査会である。開発審査会は「許可権者から独立した第三者機関として、都道府県に設置され、開発許可、建築許可等に関する議決、審査請求に対する採決を行うことを役割」としているが、第三者として公正な審査をする場であると思ったら間違いである。

沖縄県開発審査会の委員の一人は開発を許可する担当部局の現役の次長であり、公正な審査が行える要件を満たしていないのである。それにもかかわらず開発審査会が平成15年4月1日に出した決裁は「不適法な審査請求であるから、審査請求を却下する」であった。「不適法な審査請求」との採決をするのであれば「審査会自身が襟を正すべき」である。審査委員としての資格要件を満たしていない委員が含まれる委員会がどんな決裁をし

でも誰も承服できるものではない。

後日、審査会を担当する部局に小言を言いに出向いた。担当の職員は「現役次長ではなく、停年で辞められた次長が、新しく審査会委員に就任したので委員の資格要件の問題は解決した」との返答であった。それを聞いて「嗚呼、これは何を言っても無駄な人種だ」の印象を強くした。

平成16年 8月28日の新聞

釧路市で開催された第51回日本生態学会から沖縄に戻り、8月28日の朝日新聞西部版を広げたら「奇跡のリゾート」,「西表島に、美しい自然が息づく極上の楽園リゾート, 誕生」,「西表サンクチュアリーリゾート ニラカナイ」の全面広告が掲載されていた。日本の企業は節操がないとはこういうことを言うのであろう。係争中のホテルなのに堂々と新聞に全面広告を掲載するのだから、啞然とせざるを得ない

2004年4月にホテルはプレオープンし、7月に本格的な営業がはじまった。400人近い観光客が宿泊し、最低でも毎日250トン近い水が消費され、それが廃棄される。直接浦内川には排水されず、地下浸透とホテル用地内への散水との計画である。地下水位の高い海岸で、地下浸透によって排水されるものであろうか、夜間のホテルの光や車などの騒音はウミガメの産卵に影響しないのであろうかなど、専門外の私でも多くの疑問が残っている。私が危惧したように、ホテル建設前の2003年にはウミガメの産卵場所であったホテル前の浜(トゥドゥマリ浜)へのウミガメの産卵は、ホテル営業開始後には報告されていない。

学問の中立性

2003年9月13日~15日に西表島で「トゥドゥマリ浜十五夜祭」と称し、ホテル建設反対派が中心になり住民と集会を開催した。同時に西表島の住民であっても西表島の自然の豊かさや価値を十分に知っておれないであろうと「公開のシンポジウム」が開催された。このシンポジウムには関東・関西などから多くの方が集まったが、シンポジウムの講演者には西表島をフィールドとしておられる研究者も参加した。

この集会は、ホテル建設派から「ホテル建設反対派の集会」とのレッテルが貼られ、講演者とし

て参加した研究者も反対派の烙印が押された。しかし、学問の中立性とは、反対派の集会であっても賛成派の集会であっても、参加して事実を言うことである。

大変に心が痛むことであるがこの集会の講演に招待したばかりに「学問は中立」であり、反対派の集会に出ていた科学者は「中立性を保っていないから、科学者ではない」を理由にプロジェクトから閉め出された研究者がおられた。

前述のように反対派の集会であろうが賛成派の集会であろうが堂々と出席し、事実を言うのが科学者の役目であり、それが中立性であろう。

反対派の集会に出席したから「中立性が保持されない」という科学者がいるのであれば、それは明らかに体制に迎合し、学問の中立性を自ら捨てたことになる。

話は前後してしまうが2003年4月14日に西表島要望書アフターケア委員会の副委員長と私(委員長)で、沖縄県庁に要望書をもって要請に出かけた。それが新聞に報道されたら、一人の日本生態学会沖縄在住会員が私を訪問してきた。環境影響評価の必要性はなかったが建設企業から事前調査を依頼されたので「ホテル建設は環境に大きな負荷をもたらすことはない」との報告書を書いた本人である。ホテル建設企業が環境影響評価の必要性がないのにお金を出して日本生態学会員に調査をさせ、影響がないと報告しているのであるから、環境影響評価の必要性はないのに「お前は委員長としてなにをするつもりだ」と脅しにきたのである。

中立性とは「体制に迎合することなしに事実をはっきり言うこと」であり、つまらない脅しに屈して「黙りを決め込むこと」ではない。

前述したようにプロジェクトから閉め出された研究者は本当に気の毒であるが、このように気概のある研究者が居られるのであれば、日本の研究の前途はまだ明るい光が射している。

それに対して、事実を言った研究者をプロジェクトから閉め出したような「偉そうに研究者・科学者ぶっているヒト」がいるのであれば「時代錯誤であるから、リタイアしなさい」と大声を張り上げたい気分である。

7 フィールドの大切さ

フィールドは私たち研究者にとって宝の場所であり、フィールドがなければ研究そのものが成り立たない。その研究の場が失われようとするときに、なぜはっきりとものを言わないのであろうか。研究室の机の上で研究が完結し、フィールドの重要性を忘れることが、研究者なのであろうか。

フィールドとはまさに「打ち手の小槌」であり、研究者が調べると調べるだけ、次から次へと疑問を与えてくれる場所である。

開発途上国ならいざ知らず、先進国と言われるわが国中で、西表島の浦内川河口のように調べると未記載の魚類が10種もいて、未記載の貝類も出てくる場所が他にあるのであろうか。

その浦内川の豊かな自然が、風前の灯火となり、失われてしまうかもしれないのである。それに気がついた科学者なり研究者なりが立ち上がらなければ、誰がその貴重性・重要性を世の中に知らせることができるのであろうか。

手続きを踏んでキッチリとやることが重要であることは言うまでもない。しかし、時には、時間のかかる手続きの途中であっても、声を上げることが必要なこともある。組織論や方法論を議論している間に、貴重なフィールドが失われてしまったことを、私たちはこれまでに幾度となく経験しているのではないだろうか。

真に中立の研究者・科学者であれば、当然のことながら、もし企業が無謀なことをするのであれば、敢然と自然破壊の危険性を述べなければいけないし、その事実はマスメディアを通じて公表する責任を負っているのではないだろうか。

それをせずに研究室の机の上で実験や観察をし、論文を書いているのが中立だと思っているのであろうか。それは、明らかに中立ではなく、結果として企業に荷担・迎合していることになるというような簡単な論理が分からないのであろうか。

おわりに

開発をするなどとは言わない。しかしながら、自然に優しい開発のあり方の見本を示すことが、わが国の科学者や研究者の役割ではないのだろうか。

たまたま、この原稿の最終的な見直しをしている時に、沖縄県北部の森林（山原と書き、やんばると読ませる地域）の利用に関するシンポジウムに参加した。沖縄島の面積は約12万ha、その50%

が森林としても6万haに過ぎないが、「やんばるには広大な森林がある」との発表に、黙っておれず「広大な森林の表現は適切ではない」と言った。そうしたら「広大とは相対的なものであり、沖縄島の住民にとっては広大な森林であり、そんなことも分からないお前はアホか」と言われた。日本の国土の面積は約3600万haで、森林が約2600万haであるが、わが国の面積は広大であり、しかもその国土が広大な森林で占められているなどと思っている北方林業の読者はおられないであろう。中学校で用いている地図帳の世界地図の上では米粒以下にしか表示されていない沖縄島の住民の中には、6万haの森林が広大な森林だと思っておられる方々もおられる。

西表島の要望書を通じて考えると、これまでの日本生態学会の要望書の幾つかは企業にとっても、地方自治体に対しても考慮に値しないもののように扱われている。

でも、それで良いのであろうか。相手に敬意を示さない企業や地方自治体は、結局のところ市民や学術団体等から疎ましく思われるだけであろう。他人の忠告、今回の場合は日本生態学会の忠告に企業も地方自治体も素直に耳を貸してもらいたいものである。目先の利益のために「どれだけ資源を枯渇させ、環境を破壊すればよいのであろうか」、本当に懲りない人たちである。ここでは西表島の話を中心に拙文を書かせて戴いたが、同じ様なことは日本各地で起こっており、北海道も例外ではないはずである。

久しぶりに出席した釧路市での日本生態学会での公開シンポジウムのタイトルは「要望書のききめ」であったが、生態学に関しては日本最大の生態学会の要望書が本当に「ききめ」のある世の中が早くきて欲しいものである。

「要望書のききめ」のシンポジウムや要望書を持参しての要請、その後に参加した幾つかのシンポジウムなどを通じて感じた日本の科学者や研究者の中立性についての私見をまとめさせて戴いた。
(琉球大学農学部)

引用文献

- (1) 沖縄県文化環境部自然保護課編集・発行 沖縄県絶滅のおそれのある野生生物1996.
- (2) 竹富町ホームページ「竹富町 Info」より (<http://www.town.taketomi.okinawa.jp>)